

ワンピースマンと東方

Par

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーローのサイタマとジェノスは、買い物帰りにいつの間にか異世界へと移動していた。であった氷の妖精から聞かされたこの世界の名は「幻想郷」と言った。

※Pixivでも投稿しているものです

目次

ワンパンマンと東方	一撃目	—	1
ワンパンマンと東方	二撃目	—	30
ワンパンマンと東方	三撃目	—	57

ワンパンマンと東方 一撃目

体を機械で固めた青年サイボーグジェノスは思う「何と言うことは無い、いつも通りの活動だった」と。そして同時に思う「やはり、強い」とも。彼の目の前には、粉碎され周囲に飛び散る血と肉が広がる。頭上へと吹き飛んだ部位は、ボタボタと音を立て地面へと落ちてくる。一般人が見ればかなりショッキングな光景だ。トラウマになる人間もいるかもしれないが幸か不幸かほとんどの人間は、怪人の出現率の多い場所から怪人の被害を恐れ被害の少ない街へと居を移していた。

目の前に広がる肉片は、元々10mはあろう丁髷つきでカエルの様な生物だった。その生物は人語を話し「我こそは、水と陸を統べる両生の長である!!我が名は両生王トノサマトード!両性じゃないぞ!!両生である!!さあ人類よ我が前に平伏しひざまツゲオオオオオオオツ!」と、鳥獣戯画のカエルのポーズをとりながら宣言し取っつけたような名で何番煎じか分からない何処ぞの王は、カエルらしい断末魔を上げたかと思ふと肉片となった。ジェノスはヒーローだ。それもヒーローのランクでも上位のS級に一発で合格した実力者である。しかし、カエルを倒したのは彼じゃない、彼は付き添いなのだ。

「……」

「……“先生”？」

「……また」

「はい？」

粉碎されたカエルの中心には、ワナワナと震えながら己が拳を何処か恨めしそうに見つめる眩しい男。S級ヒーロージエノスが「先生」と呼び慕う『最強』がいる。男は我慢できずに叫んだ。

「また……ワンパンでおわつちまったあああああああああああつ!!!」

『最強』、ヒーロー名「ハゲマント」。本名「サイタマ」。

彼は、あまりに強すぎた。これからも、彼は強くあり、強いままなのだろう。これは、そんな最強が偶然にも紛れ込んだ異世界での幾日かの記録である。



ヒーロー名ハゲマントことサイタマがヒーローランクA級39位へ上がって間もないころの事だ。強すぎる故理解されず、強すぎる故孤独だった彼にも徐々に仲間とも言える存在が出来てきて彼の活動が少しだが彼等ヒーローを統括するヒーロー協会にも

認められだした時期、いつも通りサイタマは、(無理やり転がり込んできた)弟子のジェノスと連れヒーロー活動を行っていた。先程一撃で粉碎したカエルの化物も見た目こそカエルだがその巨体は、余りにも脅威であり災害レベルは、街が幾つも壊滅する事必至であろう災害レベル竜と指定「された」。された、と過去形であるのは、この時点ではこの両生王を名乗る怪人の存在は、ヒーロー協会に認知されておらず、サイタマとジェノスがこの怪人の存在を忘れるほどかなり後に、ジェノスの証言とわずかに映っていた監視映像から総合して判断されたものだ。

二人は買物物の帰りだった。お一人様ワンパックの卵を多く買うためサイタマが弟子の仕事だとジェノスを引き連れ安売りのスーパーへと向かいその帰りだった。ジェノスもサイタマに頼まれずともついて行く気だったので不満も無かった。そんな中偶然通りかかった沼地から現れたのが両生王トノサマトードだったのだが、瞬時に反応したサイタマの拳をくらい結果偉大なる両生王は、長き雌伏のとき、数十年というオタマジャクシの姿を経て満を持して自ら上がったが、ものの数秒でその野望が潰える事となった。

「流石です先生」

「……はあ」

サイタマの活躍を褒め称えるジェノスだが、とうのサイタマ本人は不満でしかない。

結局一撃、対して力を込めたわけじゃない拳でカエルの化物は、物言わぬ肉片と化した。いつもこうだ、とサイタマは不満で仕方ない。

ヒーローに憧れ、3年前にそうであろうと決めた時から死に物狂いで努力した結果がこの常勝無敗の力と死滅した毛根である。イヤ、この際毛が無いのはい、だが手に入れた強大な力は、敵との均衡した戦いが失われる事を意味した。手に汗握るバトル、熱い闘い、血沸き肉躍る好敵手との決闘。ヒーローとしての輝かしさよりもサイタマは、何処かでそういうのを期待していたのだが最早そんな感情を失って久しい。プロヒーローになったが、それでも自分の満足する闘いは未だに出来ていない。

平和が一番と人々は言う、サイタマ自身もそう思う。しかし己の性情たる闘争本能は能面の様な無気力な顔に隠れ消えたように見えても、今なお彼の体でかすかに燃えているのだ。平和を望む一方で好敵手の出現を望むサイタマだが、しばらくはその願いが叶えられる事はないかもしれない。

そんな何時も通りの怪人撃退後の事だった。

「……っ!?!先生!」

「んあつ?」

ジェノスは不意に感傷に浸ったり歩き出したサイタマを何処か焦った様子で引き留める。彼の機械仕掛けの両眼は、あたりを頻りに見渡しその資格情報を解析していた。そ

してジェノスは、驚いた様子で告げた。

「せ、先生。その、まったく信じられない事なのですが」

「んだよおジェノス、もったいぶらずに言えって」

「はあ……その、この場所なのですが、我々はいつの間にか移動してしまったようです」
「はっ?」

サイタマは自分の（一応）弟子が何を言ってるのか全く理解できなかった。彼はサイボーグであるが脳とかそう言った所には、生体部分もあるはずだ。サイボーグ改造の影響でついに脳がバグったかと結構酷い事を思っていた。

「すみません、俺も突然の事で説明しづらいのですが……まず周りを見てください」
「周りって、お前ここは……あれ?」

ここでサイタマは初めて異変に気が付いた。全く持つて不可解なのだが、周りの景色が「変わっていた」のだ。先程まで二人は沼が近くにある住宅街を歩きそこで両生王を倒したのだが、今はどうだろうか辺り一面森、森、森と木々が茂っていた。何故気が付かなかったのかサイタマにはわからない、単に自分がボーつとしていたならまだわかるのだがサイボーグであるジェノスが一切気が付かなかったのはおかしい。

「GPS等で位置情報を確認しましたが、俺達は全く別の場所に移動しているんです。それ以前に電波が無いので詳しい位置情報はありませんが、この「状況」が我々のみに

「何か」が起きたのかを示しています。俺と先生は気が付く間もなくあの怪人の居た場所からどこかへと移動してしまっただけです」

「はあ〜〜〜」

ジェノスは深刻そうに話しているのだが、サイタマの方は最初こそ驚いたようだったが既に顔が無気力な物に戻っていた。ジェノスは、それにかまわず自身の考えをまとめる様に喋っていた。

「催眠による幻覚やホログラム映像を疑いましたが、これらの森は完全に本物、俺のデータにある周辺地図にもこんな森はありませんし、一体何が起きたのか……って、先生！」

ジェノスはいたって真面目な性格だ。何かが起こればそれを生真面目に解析して答えを出そうとする。ならその師匠であるサイタマはどうか？一言で言うならば正反対、彼はいたっておおざっぱで不真面目な部分の方が多いだろう。ジェノスの考察も飽きたのか、彼は既に歩き出していた。ジェノスは慌てて彼を追って駆け寄る。

「先生、無暗に歩かれては危険かもしれませんが」

「ん〜……まあ大丈夫だろう、じつとしてるのは性に合わないし、何が起きたって言っても移動しただけだろ？その内もとに戻れるかもしれないぜ」

「しかし、敵の作戦と言う事もあり得ますが」

そうジェノスと言うのがジェノス自身正直敵がどんな手を使っても意味は無いと

思った。サイタマの前に小細工など無意味、とりあえずサイタマの足を止める理由を作ろうと思っただけだ。しかしサイタマは結局「いいから、いいから」とズカズカ歩みを止めず謎の森を進んでいった。それにジェノスは呆れるでも無く、やはり先生は度胸があるなど妙な感想を抱き後を追った。

「……また、妙なのが紛れ込んだわね」

そんな二人を見つめる虚空からの視線があつたことに、まるで気が付かぬままに。



サイタマの脚力は、常人のそれを超えサイボーグであるジェノスをも超える。月から地球へジャンプして戻れるのだから当然ではある。そんなジャンプ力は如何なる場面でも役立つものであり、今もその場面であつた。

「いよつとー」

ドスンと音をたて空からマントをなびかせサイタマが降り立った。地面を凹ませた着地は、降り立つというより落下と言う表現が合いそうだ。

「どうでしたか？」

「ん〜……なんか村みたいなのと屋敷みたいなのが見えたわ」

超高度へのジャンプからの地上の観察。1000mも飛び上がればそれなりの範囲を見渡せる。サイタマは、空から見て2つの人の生活できそうな場所を見つける。彼の言う「村」と「屋敷」である。

「なるほど、ではどちらかに行けば最悪人に道は聞けそうですね」
「だな」

「それで、どうしますか？村と屋敷、2つありますが」

「ああ」

サイタマは不意に視線を下ろすと、道に落ちていた木の棒を拾った。ジェノスは、サイタマの行動の意図は分からないがただじっとその行動を見る。

「よっ」

サイタマは拾った棒を軽く放り投げた。空中でクルクルと回転する棒は、重力に引かれ当然落下する。カラカラと棒が落ちるとサイタマは強く頷いた。

「あっち行こうぜ」

サイタマは棒の尖った方が倒れた方向を指さし言った。何と言う事は無かったのだ。彼は考えても仕方がないので棒で行き先を決めただけなのだ。

「えっ、先生そんな方法でいいのですか？」

「いいの、いいの。丁度あっちは屋敷があるから面白そうだし行こうぜ」

そしてサイタマはのんびりマイペースを崩さず歩き出す。ジェノスはそれが先生の意志ならばとなんの疑問も持たずついてゆく。

少し歩くと大きな湖へと出た。二人が住んでいる所は、近代的な場所である。その周りには、少し前にあつた大きな闘いの所為で街は無くなり残つたのはヒーロー本部と更地しかなく森は勿論目の前にある様な湖は無いのでいよいよ自分達は未知の場所に居るのだとジェノスと思う。そして湖からまた少し離れた所には、サイタマの言つたとおり大きな屋敷が見えた。それは不気味なほど紅かつたため、遠くからでもとても目立つ。

「あれですね先生」

「ああ……うん？」

「っ!?! 動態反応!」

目的地を確認したところでサイタマは、ふと湖の方を見た。次いでジェノスが自身のセンサー類に何か高速で動く物体を感じた。生体反応もあるため生物であるのはわかる。それはサイタマが見た方向から迫っていた。人間の出せる速度ではないので怪人か何かであるとジェノスは予想した。何者だろうか、何時の間にか連れて来られた見知らぬ土地故にジェノスは何時も以上に警戒し身構えた。

「おっ?」

ジェノスが義眼レンズで視覚映像を拡大し迫る対象を捉える前にサイタマが // それ

“に気が付いた。それは宙を飛び回りながら勢いよくサイタマへと向かってきた。

「先生！」

「ああ、いいから」

ジェノスがサイタマを庇おうとしたがそれをサイタマは制した。するとグングン近づいていたその飛翔物体は、サイタマの直ぐ真横を通り過ぎ直ぐにUターンをして湖の上に現れた。それが飛んで通った後には、パラパラと氷の粒が舞い散り、周辺の気温が下がるのがよく分かった。

「そこの変な二人！あたいの縄張りに入って挨拶も無しとは、とつても失礼ね！」

腕を組んで浮遊する者、氷の羽、青い服に青い髪。小さな少女の姿のそれは、強きに叫んだ。

（こいつは……氷の羽？人では無い様だが）

「うわ、さむっ！」

周辺の温度低下と氷の羽をもつ目の前の少女が無関係とは言えない。背中には浮くようにして氷の羽があり浮遊する姿からも彼女が人間では無い事は明らかであった。ジェノスは“敵”に容赦はない、見た目が少女であろうと自分の敵であるならば即焼却できるようにした。対照的にサイタマは、まるで警戒した様子は無くまるで近所の子供に話しかける様に話し出した。

「なんだよ、お前滅茶苦茶寒いんだけど」

「そろそろよ、あたいは氷の妖精なんだから」

「妖精？」

「そう、なに知らないの？」

生意気な態度とフワフワと浮いている姿にサイタマはどこか最近知り合った〃子供〃の超能力者を思い出す。もつともその超能力者であるS級ヒーロー戦慄のタツマキは、サイタマよりも年上であるのだがそんな事を気にするサイタマではなかった。

「へえ妖精って本当にいたんだな」

「あらら本当になにも知らないのね」

「いいからお前温度下げるとやめろよ、寒いんだって」

「だから無理よ。冷気はあたいが生きる証、生きるから出るの。だから止められないわ」
彼女の周りの湖の水は、既にパキパキと音を立て表面が凍り出した。空中の水分も冷えきり霜が降りる。彼女は氷その物、故にその冷気がとどまる事は無く、増える事はあつても減る事は無い。

「じゃあ俺らが移動するわ。悪かったな、縄張り入って」

「つてそうだった！あんたら勝手に縄張り理に入つて許されると思つてるの？」

「えー俺謝ったじゃん」

「謝ったてダメよ！あたいはとつても怒ってるわ！」

彼女はプリプリと頬を膨らまし不満を体全体で表している。実に面倒な奴に捕まったとサイタマは思った。小さな体で怒る様は、まるでどこかのS級2位のようだ。彼女はそのまま怒って話し続ける。

「最近あんた達みたい不妙な奴がふえて困ってるの！人間みたいなのとか妖怪みたいなものとか！勝手にこの湖を荒らしたりしてその度にあたいにケンカを売ってきて、とつてもとつても迷惑してるわ！」

「ええ、俺ら関係ねーじゃん」

「いいえ、あたいの勘が上げてるわ！あんたら二人は、ここの奴らじゃない、そつちのなんか重くて固そうな奴は見た事ないし、あんたなんかもう……なに、え？えつとなんの妖怪？」

「……ん、あつ?!妖怪って俺!？」

重くて固そうなのはジェノス事で間違いないが、もう一人の奴って誰だとボーツと考えていたら自分の事を言われていると遅れて気が付くサイタマ。しかも妖怪と言われ全く持って心外だと反論する。

「お前どこみてそんなこと言ってるんだよ！」

「そんな頭見た事ないわ、みごとなハゲね」

「うるせーよ!？」

「だって人間ってハゲても少しは残るんでしょ？ハゲ方が見事過ぎてもうこれは妖怪ハゲアタマとしか」

「素でハゲてんだよチクシヨウこのやろうっ!!」

ハゲだハゲだと罵られるのは今に始まった事じゃない、言われた回数は数えきれないだろう。だがどれだけ言われても慣れる物じゃない。未だ未練がましく昆布を食べたり育毛剤を試したりとしているサイタマからするといい加減にしてほしい言葉だ。

「まああんたが妖怪だろうと人間だろうとあたいは今とつても不機嫌なの、今まで通り相打ちよー!」

「返り討ちじゃねーのかよ」

「あ、そうだった？」

「勝負するならこつちが返り討ちにするけどな」

サイタマは戦いが避けられぬと悟ると少し面倒そうに拳を軽く握った。が、鋼鉄のサイボーグがサイタマの前に出た。

「先生、ここは俺がやります」

「ん、ジエノス？」

「敵は未知の存在です。先生には無用の心配ですがまず俺が様子を見ます」

「……そか、じゃあがんばれ」

「はいっ!」

赤く熱を発する右手がジュウジュウと音を立てている。冷やされる気温の中で相對する高温を発するジェノス。妖精はウググと苦手そうな相手が来たと後ずさった。

「なんだか熱い奴、あたいの苦手なタイプだわ」

「貴様がどれ程の実力を持つか知らないが、先生と戦いたいのならまず俺と一戦交えてもらおう」

「ケンカを売られた!」

「最初に売ったのは貴様だ」

「そうだっけ? けどいいわ、なぜならあたいは最強だから!」

その自身がどこから来るのかしらないが、ジェノスは油断せぬよう心掛ける。自分は今まで色んな怪人と戦ってきたが、恥ずべき事に油断して負ける事が多かった。見た目が少女の妖精であろうと油断は禁物だ。

「一応は名乗ろう、俺はジェノス、こちらのサイタマ先生の弟子だ。妖精、お前の名は」
「あたいはチルノ、氷の妖精。固そうな人間、絶対零度は辛いでしょうけど凍っておしまいにしておあげる。ケンカは買ってそして勝つ!」

妖精チルノが吠えると周辺の温度が今まで以上に低下する。サイタマが「さむっ!?!」

と叫んでいるが今この周辺は—20度を下回った。さむつと叫んで済む温度でもないのだが、彼は普通の人間とは一線を画すので気にしてはいけない。ジェノスと言うと体の動力を可動させボディの温度を上げた。気温差と凍結しては蒸発する霜の所為でジェノスから蒸気が上がる。戦闘開始である。

「先手必勝!」

ジェノスから距離を取ったチルノの周りに輝く光弾が展開された。それは一気にジェノスへと飛来する。光り輝く遠距離攻撃は、ドカドカ音を立て土煙を巻き上げた。それを見てチルノはどうだ見たかと自慢げに笑う。

「鮮やかに勝利! やつぱりあたいたら最強ね!」

「終わりか?」

「へっ?」

「焼却っ!!」

土煙から聞こえた声に反応して確かめる間もなく、煙の中に赤い超高温のエネルギーが凝縮され放たれた。ゴオツと音を立て放たれたその熱線は、一瞬の内にチルノを飲み込み湖の水の多くを蒸発させ射線にあつた森や山肌を削った。サイタマは、チルノが熱線に飲まれた時「ピチューン」と音が聞えたが気がした。

「おお、相変わらず容赦ねーな」

呑気な感想を漏らすサイタマ。熱線が収まると煙も吹き飛んだのか無傷のジェノスが姿を現した。腕が展開しその掌底から放たれた今の攻撃は、チルノに抵抗の間も与えず消し飛ばしたのだ。

「どうやら先生が戦うまでも無かったようですね」

「みたいだな」

ほんの数秒で着いた決着にジェノスは思う事も無く、サイタマもこんなものかと思うだけであつた。小さな少女の姿を吹き飛ばす事に関しての罪悪感も敵とわかつた以上ジェノスには無い。では館へ行くかと移動しようとした時チルノが消滅した所から声が入る。

「死ぬかと思つた!」

「なにっ?」

ジェノスが驚いた様子で見ると、そこには先程焼却されたはずのチルノがジェノス上に驚いた様子で相変わらず浮いていた。

「跡形も無く蒸発したのは久しぶりだわ。死なないけど死ぬかと思つた」

「貴様、生きていたのか?」

「知らないみたいだから言つてあげるわ。妖精つてのは“自然”なのよ。あんたは、自然を殺しきれるの?」

子供の様な見た目のわりに理知的な事を言う。考え無し馬鹿とは違うのかとジェノスは考えを改めた。

「つて、前誰かに聞いたわ!」

訂正、やはり馬鹿らしい。どうも自分でも死なない理屈等を理解しきれていないようで、誰かに聞いた説明をそのまま言っただけの様だ。しかし「死なない」とは中々の脅威である。不死身の如く再生力を持つ相手は何度か戦った事はある。しかしそれらは、あくまでも凄まじい再生力で不死身に近いだけであり肉体の再生には、体の一部が残る必要がある。しかし妖精は、チルノは違う。ジェノスは彼女が跡形も無く蒸発したのを確認している。センサー類でもそれを確認した。つまり彼女は、「無」から再生したのだ。これでは、相手が如何に実力が下でも何時か此方が力尽きる。どうするかと思考を巡らせた時、今度はサイタマがジェノスの前に出た。

「先生?」

「ん、俺がやるわ」

彼の表情はいつも通りだ。怪人と相対した時、スーパーで買い物をした時、いつもと変わらぬ彼だった。ジェノスはサイタマがいつも通りならば、今回もいつも通りに適当に話が付くと悟る。ならばと、「わかりました」と一礼をして彼は、後ろへと下がった。

「なあチルノ」

「なにハゲアタマ?」

「うるせえよ!」

悪気を一切感じさせないチルノの純粋な言葉がサイタマの心に突き刺さった。彼女は本気で彼を妖怪ハゲアタマと思っっているようだ。おのれこの小娘、サイタマはギリギリと歯ぎしりをしながら睨みつけた。

「お前が死なないのはわかったよ。けどこのままジェノスと続けると多分その内ここが吹き飛んで更地になる。それはお前も嫌だろ」

「嫌に決まってるわ」

「じゃあ次で最後な?今度は俺が相手だ。さつきと同じ、お前が一回死んだらお前の負け」

「あたいが勝つ条件は?」

「俺が死んだらでいいよ」

「……ふーん」

実に生意気だ。チルノは頭の眩しい「妖怪」を見てそう思った。「俺が死んだらでいいよ」だと?まるで自分は、死ぬ訳が無いと言うようだ。無作法不躙な無法者め、この最強チルノ様の縄張りに入っただけでも自分が主導権を握っているようではないか?今迄現れた妙な奴らとは、違うようではあるが新参者に違いない。先程は油断したが教えて

やろう、妖精の本気を。

「誰もが皆もあたいを妖精と言う。侮って痛い目を見る妖怪め！」

「わけがわからんな……まあ遊ぶか」

ここに第二ラウンドのゴングが鳴る。今度は一切の油断なし、チルノの冷気も先程以上に上がり（下がり？）心なしか氷の羽もその大きさを変えたように見えた。

「教えてやろうハゲアタマ！ここでは、スペル〈技〉を使つて戦うの！」

チルノは懐から一枚のカードを取り出した。タロットカードの様なものだが、その絵柄までは見えない。

「氷符アイシクルフオール！」

チルノが技を宣言した。すると彼女を中心に先程の様な光弾が現れる。だが今度はそれ以上に氷の弾丸が多い。扇状に広がりそれがサイタマとその周辺めがけ撃ち放たれた。

「へえ……」

サイタマは、その氷弾を難なく避ける。彼女の攻撃は、近くにいたジェノスにも襲い掛かったが、これも彼は焼却砲で軽く防いだ。他の地面にぶつかり炸裂した氷弾は、バシバシとその地面を凍らせた。その氷弾一つ一つが氷点下の温度となり、温度が即ち威力に直結していた。

「よけたな！」

「避けるさ、寒いしな」

「うぐぐ、続けてくらえ！」

今度は普通の光弾の連射でチルノは攻撃を仕掛けて来た。花火の様だと先程サイタマは、感想を抱いた光弾だがこれもまた攻撃である。常人には、その高速の弾速は見きれないだろう、或は美しさに目を奪われている間にやられるかもしれない。だがサイタマはそれすらも難なく避ける。ユラユラと揺れる様に、攻撃が来る場所を完全に見きつて歩く様に彼は攻撃を避けていた。

「なんて奴！草みたいにユラユラうっとおしいなあ！」

チルノは思わず叫んで毒づいた。

「ならこうだ！凍符フリーズアトモスフェア！」

チルノは二枚目のカードを取り出し叫んだ。すると先程の弾幕と違い今度は、彼女を中心に冷気が展開した。空気の凍る音が聞こえ出す。凄まじい彼女の冷気の表れだ。そしてその冷気は牙をむく。

「……おっ？」

サイタマは両手両足に異常な冷たさを感じた。不思議に思い手を見るとそこに氷が付いていた。

「知ってるか？フリーズは、動くなつて意味もあるんだってさ！空間を凍らせたなら避けられないだろ！」

この異常な冷気によつて凍らされた空気中の水分が彼に付着したのだ。その氷は、凄まじい速度で成長していく。人間ならば凍傷は確実、並の妖怪でもその重みで動きを制限される。腕と足の表面が氷で覆われるのを見てサイタマは、動きを止めていた。

「そらみろ凍つたな！」

サイタマの体が凍り出したのを見ると、チルノは続けてカードを構え叫んだ。

「冷符瞬間冷凍ビーム！」

彼女の手から一直線に真白の超低温の光線が放たれた。その技の名の通り、瞬間に光線の射線上の空気と湖の水は冷やされまるで氷が空中を走るように見えた。

「あぶないー！」

「ん？」

ジェノスがサイタマに向かい叫んだ。サイタマは、その声に気が付いてはいたが動く事なく超低温の光線に飲まれた。バキバキと音を鳴らし光線の着弾点周辺は凍り付く。その中心には、氷像となったサイタマがいた。

「な、なんとという瞬間冷却……さつき以上の温度低下だ……クソ、離れていたが俺のボディにまで影響が出るなんて！」

急激な温度低下は、遂に生身ではないジェノスにまで影響を与えた。例え鋼鉄の肉体でもサイボーグである以上完全なロボットではないため生身の部位はある。更に彼のボディには、多少なり油等の液体も使われていた。通常機械に使われる油が凍る事など滅多にないが、チルノから発せられ撃ち出される冷氣と氷はそれすらも凍らそうとしていた。

(そ、それよりも先生は……いや、死ぬ訳は無いが凍ってしまった以上動きが取れないっ！)

今すぐにもサイタマを助けに行きたいが超低温の空間では、彼もまた動きを抑制される。動力をフル稼働させ熱を発して凍り付くのを防いでいるが、空気中の水分が彼の体に付着し凍る。そして蒸発した水分までも再び凍り付いていた。超高温と超低温が彼を中心にぶつかり合い溶かしてもまた凍る堂々巡りとなっている。サイタマの実力を知っているために凍った程度で死ぬ事は無いと言い切れるが、見た目では完全にサイタマは凍り付いている。この隙に砕かれてもすればいくらサイタマと言えど危ないと思つた。

「そらカチンコチンだ！そして決着！」

この隙を見逃すチルノではなかった。とどめとに食らえと弾幕を放つた。

「先生っ！」

ジエノスが無理やり体を動かし助けに入ろうとした時、サイタマの氷像にピシリとひびが走った。そして次の瞬間には、氷像が粉々に砕けるがその中に居たはずのサイタマの姿が無い。どこへ消えたのかチルノはキョロキョロとあたりを見渡したがふと自分に影が落ちているに気が付く。遮蔽物は無く頭上に物も無い何何故影が自分に落ちているのか？何か奇妙だと思つた時、チルノの後方から声がした。

「お前は夏に欲しいタイプだな」

「いっ!」

まず一つ言うならば、彼サイタマは空を飛ぶ事は出来ない。人間は空を飛べないと彼もそう言っている。そしてチルノは、依然として空中に浮いている。その後ろに現れたのだ。サイタマが。では、サイタマは、空を飛んでいるのか？否、こちらも依然として宙を飛ぶ術は無い。では何をしたのかと言えば単純な話である。彼はただ地面を蹴つて飛んだだけだ。丁度チルノの後ろに落ちてくるように、同時に拳を振りかぶりながら。チルノには、その拳が実際の何倍もの大きさに見えた。

「ひよ、氷着っ!!」

「おっ?」

咄嗟だった。思考する間もない本能がそうさせたのだ。チルノは、体を氷で包み込みさらに膨張させた。サイタマは少し感心したようにして拳を引つ込めた。膨張する氷

は、サイタマを遠くへと押し出していった。

(先生、やはり無事だったか……流石です)

ジェノスはまずサイタマの無事を喜び安堵した。同時に僅かでもサイタマが負けると思った事を恥じた。しかしそこまで思わせたあのチルノと言う妖精の強さも大した物だとも考える。

(災害レベルなら虎以上は間違いない。場合によつては鬼、か)

そこに居るだけで凍傷になるほどの低温を発生させるのだから、ヒーローにとつてもやはりやりにくい相手には違いない。サイタマに対する防御への反応も良かった。そしてこんな「妖精」が居るこの場所がはたしてどこなのかより謎が深まった。

一方サイタマは、弾くようにして押し出された後湖に投げ出された。宙を飛び回れない彼は、弾かれた勢いと重力に逆らう事は出来ない。そんな状態のサイタマにチルノは、追い打ちをかけようと追いかけて来た。

(あたいの天才的頭脳が告げている……いつ、ヤバイ!)

天才か否かはさて置きチルノの危機感知は、間違つてはいない。サイタマは、ヤバイ。その強さを表現する場合、そうとしか言えない。幸いにもサイタマは飛ぶ事が出来ないのだと分かり短期決戦を選ぶ。チルノは、渾身の力を籠め技を叫ぶ。

「氷塊ッ!」

チルノの手に現れたのは、彼女の体の何倍もある巨大な氷塊であった。それはハンマーのような形をしており、チルノにとつて「凄くてゴツイ」と言う強さのイメージそのものだ。それを放つ。振りかぶり水に落ちようとするサイタマに向かって確実に当てる。

「おお?」

「グレエエトオオックラツシヤアアアアアツ!!」

氷塊が水面にサイタマごと叩き付けられると、水面が衝撃で波打ち同時に凍った。衝撃が氷と言う形になっていく。なおも氷塊は形を保っている。氷塊を核にして肥大化する氷の重さは、既にチルノの体重を軽く超え湖に沈みながら凍っていく。

「冷気と重さ!凍って潰れろ、ハゲアタマ!」

チルノは勝ちを確信する。手応えはあった。自分の生み出した氷塊にサイタマがぶつかった感覚を確かに感じた。であれば勝ったのは自分だ。間違いなく。

相手がサイタマでなければだが。

凍り付いた湖にひびが入ったのは、チルノが勝利を確信して直ぐだった。ひび割れ万華鏡の様に反射する氷には、確かに見えた。氷よりも眩しい輝く頭が。

「技を宣言するつてのは気持ちいよな」

「あつ」

「俺もたまにするんだよ……こうやってな」

氷が粉碎されたと思うと既にサイタマが目の前に居た。今度はもう氷をまとつて防御する暇が無かった。明らかに先程の攻撃と速度が違う。チルノがその瞬間考えれた事は、自分は手を抜かれていたと言う事実だった。

「普通のパンチ」

気合も無い、雄叫びでもない、ただ普通の呟きのようにして宣言された普通の拳は、たやすくチルノを消し飛ばした。

見知らぬ地での“一撃目”は、こうして放たれたのだ。



「まいったー!」

消し飛んだチルノは、ジェノスの時のようにもう復活を果たした。ダメージが大きかった所為か再生は、少しばかり遅れた。

「一回消えたのにダメージとか蓄積するのによ」

「気持ちの問題よ」

ようは疲れたと言う事らしい。

「強いわねあんた達、あたいの子分にしてもいいわ」

「いやそれはおかしい」

「ふつうお前がなるんだろ」

負けたチルノが二人を子分にしようとする。なんともおかしな提案だ。呆れる二人にチルノは、とても自慢げに説明しだす。

「わかってないわね二人とも、強い子分を従えるあたい……つまりあたい最強！」

敗北した事実をすつ飛ばした提案であった。実に都合がいい頭の構造をしているようだ。二人は呆れるばかりだ。

(やはりバカか)

「バカかお前」

「なにおう!？」

罵倒をジェノスは、心の中で思ったがサイタマは、普通に声に出していた。

「それよりチルノ、一つ聞きたい」

「なによジユ……ジェエ? じえじえじえ?」

「ジェノスだ。あそこにデカイ屋敷があるが、お前あれが何か知ってるか?」

ジェノスは、当初の目的地である真つ赤な屋敷を指さし聞いた。チルノは、ああなるほどと頷き答えた。

「あんたらあそこに用があったのね」

「知ってるのか？」

「あそこは紅魔館って言うのよ、ここじゃ割と新参の方んだけどあいつらが来てから新しい妖怪やら何やら増えててよく分かんないわ、なんなら案内ぐらいしてやるわ」

「案内か……そうだな、頼もうか」

紅魔館と言う屋敷は、既に視界に入る距離ではある。その点で案内など必要は無いのだが、しかし現地の人間（妖精だが）を連れていた方が、相手に対しても警戒心を抱かれずに済むかもしれない。チルノは、少し抜けた所があるが今の自分達にとっては、貴重な情報源でもある。ジェノスは、彼女の提案を受け入れた。

「……そういえばここはどう言った場所なんだ」

「ああ、そう言えばあんた達迷ってたのね。ここってこの湖？」

「それより、つまりだな……お前が住んでいるこの土地は、なんて所かと言う意味だ」

妖精が舞う世界。自分達が見慣れた物は、怪人や怪物達だ。最早疑う余地は無いかもしれない。ジェノスは、最後の確認をしたかったのだ。自分の考えが正しいか、予想があつてるのか。

「だったら一言、ここはね「幻想郷」って言うのよ」

きつとここは、別の世界だと言う事の。

(そういやサボテンに水やってないな)

サイタマは、特に何も考えてなかった。

ワンパンマンと東方 二撃目

チルノに案内されながらサイタマ達二人は、幻想郷と目的地である紅い館について聞いていた。

「は、異世界？」

「そうと俺は考えてます」

ジェノスは、自身の考えである「幻想郷異世界説」をサイタマに話した。迷い込んだ状況とチルノと言う妖精の存在から導き出した答えであった。

「マジか」

「まだ確定ではありません。ここが我々の知らぬ地球のどこかと言う事も勿論あり得ますが、GPS等の機能が働いていない事とクセーノ博士やヒーロー協会とも連絡が取れない状況です。一応チルノの様な妖精が人為的な生命と言う線もありますが、恐らくは違うでしょう」

「なるほどな」

「よくこんな直ぐに色々考えれるなどサイタマは感心した。自分はサボテンに水をやり忘れたぐらいしか考えてなかったのに。同時に思ったのは、もし本当に異世界なら

ちよつと期待してもいいんじゃないかと言う思いだった。

(強い奴とかいるかな)

確定しない話を続けても仕方ないので、話は館の事へと移った。チルノ曰くあの館は「紅魔館」と言うらしい。名は体を表すと言うものの、紅いから紅魔館なのか、紅魔館なので紅いのかは知らない。そしてまた一つ興味深い話があった。

「吸血鬼?」

「そう、吸血鬼」

館の主は吸血鬼であると言う。吸血鬼と言えば血を吸う有名な化け物である。血を吸うと言えばジェノスは、何時かの蚊の女怪人を思い出したが特に関係も無い事であろうとすぐに忘れた。そもそもあれは、秘密結社「進化の家」の創り出した怪人、この幻想郷に住む者とは、関係があるはずが無い。

「では話をできるような相手ではないかも知れないな」

「どうかしらね。一応人間のメイドも勤めてるし早々訪問者に襲い掛かりはしないわ」

「……早々襲い掛かった貴様と言うと、どうも信用できん」

「失礼な」

チルノは、自分のテリトリーに無断で侵入した無法者を成敗してやろうとしただけだと自身の正統性を主張する。とは言え行き成り襲い掛かったのは事実なのでチルノも

強く反論はしない。

「おつ門が見えた……うん？」

二人の会話を聞き流していたサイタマが見えてきた紅魔館の門に気が付くと同時に門の横に誰かが居るのにも気が付いた。サイタマに言われジェノスもその人物を見る。腕を組みじつと立っている緑のチャイナ服の様な服を着た女性だった。

「ああ、あれは門番よ」

「門番？」

チルノがジェノスへ説明する。

「紅美鈴って言う紅魔館の門番してるやつ」

「ふむ」

「デカイ館となると門番も居るものか。別に不思議なことではない。三人は近づいていくとその門の大きさに感心しつつ、不動の構えの門番に警戒した。

（むっ……隙が無い）

緑色のチャイナドレスが風に柵引いてもその身は一切の動きは無い。言葉を発さぬ威圧感、ジェノスはかなりの腕前と感じとる。門番と言うならば彼女に了解を得るか、または彼女を倒し館に入るしかない。

（……いや俺達の目的は、幻想郷とやらについて話を聞く事だ。館への侵入が目的では

ない)

戦い詰めの毎日の弊害なのか自然と闘う発想が生まれてしまった。サイタマとジェエノスは、それぞれが両極端な人間（とサイボーグ）だ。サイタマは、人畜無害な一般人のようで割と喧嘩っ早く頭に血が上りやすい所がある。ジェエノスは一見してクールなサイボーグだがこちらでも周りが見えなくなる事が多い。弟子は師に似るのか、似たもの同士が集まったのか。

「失礼、少し尋ねたい事がある」

ジェエノスは、一定の距離を保ちながら美鈴に声をかけた。

「……」

帰って来たのは、沈黙だけだった。それは決して門を通さぬと言う無言の返事なのだろうか。ジェエノスは、無理やり押し通ろうかと構える。

「あ、まったジェエノス」

しかしそれを見てサイタマが待ったをかけた。

「先生？」

「あゝこいつもしかして」

サイタマは、なお不動の構えを説かぬ門番を覗き込んだ。すると「やつぱさうか」と頷いた。

「こいつ寝てるわ」

「え?」

大変気の抜ける結果だった。寝てるだと? ジェノスは、まさかそんなと思いつつサイタマと同じように彼女に近づきその顔を見るとなんと間抜けな事か門番である彼女は、コックリコックリと舟を漕ぎ立ちながら眠りについていて。啞然とする。隙が無いと警戒したが隙だらけだった。

「この門番はたまに居眠りしてるわ」

「……門番だよな?」

それはつまりサボリではないのか? サイタマはそう思わずにはいられない。

「なんにしても寝てるだけなら脅威も無いでしょう、起こして話を聞くとしましょう」
肩透かしを食らったためかジェノスの言葉には、若干力が無い。ともかく門番の彼女を起こして色々と幻想郷の事やその他諸々話を聞いた方がいいだろうと手を伸ばし肩を叩こうとした。

「あ」

それを見てチルノがジェノスを止めようとしたが、それよりも先にジェノスの視界は反転することになる。

「んなつ!」

「おおっ?」

驚愕するジェノスと感心した声を上げるサイタマ。ジェノスは自分の体が完全に回転し頭から地面に落ちた事を衝撃を感じてから認識した。

(な、なにが起きた……っ!)

状況を確認しようとするが、頭部への衝撃が大きかったのか生身の部分である脳が揺らされサイボーグながらも脳震盪のような症状が出ていた。視界がゆれる中で見たのは、自分を見下ろすあの門番だった。

「你好、お客様」

その明るい笑みち挨拶は、正にジェノスを投げ飛ばしたと証明するかのようであった。

「婦女子の体に行き成り触れるのは、マナー違反では」

「なら起きててくれよ、門番」

「あ、それ言われると弱い私」

目覚めた門番、紅美鈴とサイタマは、事も無げに語り合っている。ジェノスは地面に大の字になりながら驚いたままだった。自分に起きた事が飲み込めていないジェノスにサイタマが気が付くと、彼は笑いながら美鈴を指さした。

「お前こいつにクルッと回されたんだよ」

「おや、見えましたか」

「見えるだろあんぐらい」

「ふむ？」

何とか立ち上がりながらジェノスは、にこやかな美鈴を見た。一見して華奢な女性だ。しかし、サイタマの言葉もあつたが確かに自分は、この女性に投げ飛ばされたようだ。それも一瞬の内、サイボーグのセンサーで認識できないほど早く。

（隙は、やはり無かったのか……）

「あんた大丈夫？」

「……俺は、まだまだ未熟だ」

「そりゃ熟れないでしょ、鉄ならさ」

「そう言う意味ではないが……」

自分もやはり未熟だ。この少しの間にジェノスは猛省していた。そんなジェノスの事を一応心配してチルノが声をかけるが、頓珍漢な答えで終わらせた。そんな二人を無視するように、サイタマは美鈴と話をしていた。

「すごいなお前、ジェノスから一本取るなんて。けっこう強いんだな」

「いやいや私もまだまだです。そういうあなたこそ私の動きを目で追いましたね」

「難しいことじゃないだろ？」

「出来る方には、しかし普通は難しい」

サイタマは、弟子であるジェノスの強さをよく知っている。自分の感覚で強さを測る事は、案外当てにならないと知っているが、ジェノスは一発でS級ヒーローになれた実力者であり、最近になってパーツを変えより強さを増した。そのジェノスがいとも簡単に投げられた。これは中々面白いと思えた。美鈴もまたジェノスに使った技を見切ったサイタマに興味を持ったようだ。

「しかし見ない顔、氷精あなたが案内を？」

「あたいの縄張りに来たから返り討ちにあった」

「あったのか……」

「ここに来たと言って言うから案内してやったのよ」

「それはご苦労様。しかしご両人、御用は何でしょう。あ、それと突然失礼しました」

チルノから事情を聞いた美鈴は、ジェノスに謝罪をしながら改めて門番としての仕事に戻る。

「い、いや……俺の方も油断があった。俺はジェノス、こちらはサイタマ先生だ。それで用件なんだが、実は……」

ジェノスは簡単に事のあらましを話す。瞬き程の時間で幻想郷に紛れ込み、チルノと出会い人里か紅魔館へ行くか悩んだ挙句ここへ来たと素直に告げた。そしてよければ

こういつた事態が珍しい事か、それとも比較的あり得る事かも確認をとる。

「ほうほう、ではお二人は「外来人」と言う事になりますね」

「外来人とは？」

「そのままの意味です。ここ幻想郷は、外より隔離された場所、しかし稀に外より何かしら紛れ込む事があります。人か、物かは問わず……俗にそれを外では神隠しと言う」
「ここでこの幻想郷が異世界だと判明する。つまりサイタマ達は、神隠しに遭つたのだ。」

「特に珍しい訳でもなければ、さりとてよくある事でもない。そんな感じの事なのですよ。色々原因はありますが、まあお二人の場合状況から偶然迷い込んだとかそのあたりでしょう」

「自分は専門家ではないですが」と美鈴は念を押す。

「帰る手段はあるのか？」

「無論あります。ここからは見えませんが、ある山に博麗神社と言う神社があります。その巫女に頼めば帰る手段を教えてくれるでしょう。すぐに、とはいかないかもしれませんが」

「いや、それだけ聞ければ十分だ。助かった」

「行くのであればまず人里へ行くところらしい」

目指すのは人里、先ほどサイタマが見つけたと言う村である。ちようど反対方向になるので、特に問題なく行くことができるだろう。

「お待ちを」

二人が人里へ向かうとわかったのか、美鈴は二人を引きとめた。わずかに声のトーンも変わっている。極端な敵意はないようだが、様子が変わったのはわかる。

「一つお願いがあるのですが」

「俺達にか？できる事であればかまわないが」

「問題はないでしょう、そしてお願いとはそちらの御仁に」

「お？俺か」

美鈴はサイタマの事をじつと見据えていた。その目には、明らかな闘志が宿っている。サイタマは、なんとなく彼女が何を頼みたいのか悟った。

「そちらの方は、純粹な人間ではないようですが貴方は、強い人間ですね」

「ははは、聞いたかチルノ？こいつちゃんと俺を人間だとわかつてくれたぞ」

「あれれ本当に？」

「嘘言うかよ」

まだサイタマを妖怪と思っていたチルノは、疑う様にサイタマを見る。これ以上は無駄かとサイタマも諦めた。

「幻想郷じゃ皆バンバカ弾幕ごっこで勝負して体が鈍るのです。たまには誰かと組み手でもしたいんですよ」

「ならやるか？」

「……先生？」

とんとん拍子に決闘が決まっていた。ジェノスは、乗り気なサイタマを少し意外に思った。以前ジェノスは、サイタマと模擬戦をしたことがある。その時は、無理を言つて戦つてもらつた上に手加減をされていた。美鈴の提案に軽く乗つたのは、どう言う心境の変化かジェノスには、わからなかつた。

「お話を聞かせた対価代わりにでも」

「いいぜ俺は」

「おいおい門番。そいつ強いよ？」

チルノは、サイタマがトンでもない奴だと身をもつて知っているので美鈴に忠告した。

「強いでしょうね。自惚れるつもりはありませんが、私の動きを人間で特別な力なく目で追えたのは、あなたが初めてです」

「そういう強さじゃないんだけどね」

「まあいいじゃねーかチルノ。なあ、俺さつきチルノと戦つただけで、そんな時の……あ

あ、今言った弾幕とか言うのじゃなく殴りあいか？」

「チルノと？勝ったのですか？」

美鈴は、二人がチルノに出会った事と戦闘になった事は聞いていた。ただ説明したのがチルノとジェノスの二人で、戦闘に関してはジェノスとチルノの戦いだけを聞いていたため思わず聞き返した。

「勝ったけど？」

「言っとくけど、こいつ飛べないし弾幕出せないから」

「……」

「これは驚いた」美鈴は、驚愕か戦慄にも似た感覚を覚えた。目の前の男は、確かに強者だ。それは間違いない。だが人間として頭一つ抜けた強さと考えていた。彼女は、考えを改める。

チルノは妖精だ。妖精は基本妖怪等の強さのヒエラルキーでは、下に位置する。しかしその妖精の中でチルノは、特別に強い妖精であり並の妖怪相手でも勝てる強さを持つ。普通の人間が勝とうなど思うのは、まったくの自惚れだ。

この幻想郷には、ごく一部人間でも特別な地位と強さを持つものがある。先ほど美鈴が言った巫女なる人物がその一人であり、美鈴も巫女に手酷くやられた記憶がある。だがこの男サイタマは、特別な力を感じさせない普通の人間だ。しかし武に心得がありそ

うだと思い、それに合わせて組み手でも久々にしたいと思ったのだが、チルノを倒したと言うのなら話は別である。チルノからもその事に肯定と取れる言葉が出た。同時に彼は空を飛ばず弾幕が出せないと言う。いよいよ普通の人間のはずなのだが、しかし違う。

「念のため聞きますが、知恵比べで勝ったとかではありませんね？」

「ちげーよ、普通に殴った」

「めっちゃ痛かったんだからな」

「悪かったよ」

普通の人間がチルノに出会った時の対処法には、謎々を出すと言うものがあり、人里の知がそのように教える事がある。チルノの強さは、妖精を超えたものであるが残念な事に頭が良いわけではない。頓知の利いた謎でも出せば頭を捻り出すのでその際に逃げるのだ。一応その対応をしたのかと疑ったが、やはり違うようだ。

つまり勝つたのだ。目の前の男は、飛ばず弾幕も出せず、拳だけで人ならざる者に。

(面白いじゃないですか)

遊びのつもりではあった。だが久々に本気の組み手が出来そうだと武術に生きる者として血が騒いだ。

「……ジェノスさん、この方の強さはあなたから見て如何ほどでしょうか？」

最後にサイタマと一緒に現れたジェノスに聞く。ジェノスは、一度サイタマを見てから美鈴を見る。そして自信を持って答えた。

「失礼を承知で言うが、あなたじゃ勝てない」

迷いの無い言葉。美鈴は、それこそ聞きたかったのだ。

「サイタマさん、お手合わせ願います」

「ああ」

ジェノスの言葉が真実なら、これは美鈴が挑戦者だ。違つたとしてもチルノを倒せる程の人物、どっちにしても美鈴は闘いが楽しみだった。

二人は、少し門から離れ相対する。

「……一つ、チルノからスペルに関して簡単に聞いたようですが、更に御教えします」

「まだなんかあるのか？」

「スペルを持つ者は、何か能力を持ちます。彼女、チルノであれば、冷気を操る程度の能力」です」

「程度？」

確かにチルノは、氷を生み出し冷気を発していた。しかしそれは、程度で済ませるほどの小さな力ではない。今も少し離れて出来る限り冷気をセーブしてもらってやっと寒さが抑えられたのだ。美鈴の言い方にサイタマは、納得がいかなかった

「言い方の問題です。別に悪い意味じゃないのですよ。チルノは氷を生み出すので、氷を操るとも言えます。氷や冷気、表現は様々で厳密に言えなかつたりするのでそういう言い方になるんです」

「ふうん？ つて事は、お前もなんか能力があるんだろ」

「ええ、私は“気を使う程度の能力”」

「お茶でも淹れてくれるのか？」

「ふふ、気功とかの方ですよ」

見せた方が早いと美鈴は、両手を合わせ呼吸を整える。するとサイタマとジエノスには、彼女の体が少し輝いて見えた。

「面白そうだなそれ」

「これも見えたみたいですね。気は生命のエネルギー、それを私は操れる」

「……つまり、ちよつとは楽しめるつて事で良いんだよな？」

それはまるで挑発のようだった。だがサイタマは本気で聞いたのだ。ただ強いだけじゃないと言う事を確認したかったのだ。美鈴もそれを承知していた。だがその言い方にカチンと来ないかと言えば別であろう。

「私も楽しみたいものです」

「……じゃあやるか、少しずつペース上げてく感じで」

「そうしましょうか」

気は今練った。体にエネルギーが巡り何時でも闘える状態だ。美鈴は、体を構えた。いかにも拳法家と言う様な構えだった。一方サイタマは、特に構えてはいない。まるで突っ立っているだけのようにも見えた。構えないのか？美鈴は、不審に思ったがサイタマの目は、じつと美鈴を見て捉えていた。

(隙だらけなのに、隙が無い……ッ)

奇しくもそれは、ジエノスが寝ていた美鈴に抱いたものと同じだった。立っているだけなのにサイタマに隙が見えなかった。一見すれば隙だらけだが攻撃できる形が思いつかない。こう言った場合こう着状態になり最悪千日手になってしまうのだが、それは美鈴もサイタマも望む展開ではない。美鈴は意を決し、攻撃をしかけることにした。

(初手で様子見を)

様子見、しかし本気で。彼女が踏み込むと、その姿が掻き消えた。彼女がいた場所だけで僅かに土埃が舞うと、一飛びでもって5 m離れたサイタマへと肉薄した。放つのは、力を込めた拳、あえて狙うは隙だらけの体。

「——ッ!?!」

入った。そう思った。しかし美鈴の拳は、サイタマの体をすり抜けた。そのように見えた。だが実際は、超高速で動いたサイタマの残像に拳が飲まれただけである。

(消えっ！いや——)

サイタマ本体消えたと思った。しかし、美鈴はすぐさま体を下げた。ヒュツと風を切る音が鳴ると、彼女が被っていた帽子が飛んでいった。美鈴の頭の上をサイタマの拳が通過した。

「お、避けた」

「シュツ！」

「おお」

今度は、連続の突き。美鈴の手が幾つにも見える。全てがサイタマに向かい急所を狙っていた。しかしサイタマは、一步も動かずに上体の移動だけでそれを避けて見せた。

(これもっ!?!ならば)

美鈴は、攻撃の中に罠を混ぜた。一手、サイタマが美鈴の思った方向へ逃げるよう攻撃をして突き切らずに体勢をずらし左の拳を握る。サイタマの体が左側に動くのを見て狙った通りの位置に避けてくれた事に喜び、軽く体を下げそこから勢いをつけて拳を突き上げる。形としてはアツパー、上手くいけばサイタマの顎へとあたる。だが、それは叶わない。

(なッ!?!)

美鈴は見た。自分が振り上げようとする左手に向かうサイタマの右手手刀を。いつ放たれたのかわからない攻撃、それがほんの僅かに迫っていた。

(振り抜く!?!戻す!?)

攻撃か、防御か。選ぶならどちらか、思考するような時間も無い中美鈴が咄嗟にとつた行動は、攻めて避ける事だった。避ければ隙を見せる。拳を無理に引かず美鈴は、あえて踏み込んだ。サイタマと彼の右手の間には、僅かに隙間がある。潜り込むようにしてそこへ入るとサイタマに背を向け踏み込んだ。

「カツ!!」

サイタマに背中からの体当たり。それは中国拳法、八極拳で有名な鉄山靠と言う技であった。背中からぶつかるそれは、様々な漫画、ゲームで使われ八極拳の代名詞のように使われている。そして美鈴の鉄山靠は、ただの鉄山靠にあらず。凄まじい速度で繰り出されたそれは、一見して踏み込みが無く威力が低くなると思われる。だが彼女は、ほんの少しの動作をもって強い踏み込みを行い一気に爆発的攻撃を行うことが出来る。その威力は、まともに食らえば、妖怪とて骨を砕かれるほど。それは、気を使う程度の能力で気を高めた事も勿論だが、紅美鈴と言う鍛え抜かれた達人である彼女だからこそ出来る技である。

サイタマは、鉄山靠を食らいドンッと押され山なりに飛んだ。その体は、宙に浮いて

いる。落ちる前に畳みかけようと美鈴は、また踏み込んでお互いの距離を縮めた。

「ハアッ!!」

放つのは右手掌底。獣の牙の如く襲い掛かりサイタマの腹部へとめり込んでいった。今度は、間違いなく攻撃が入った。サイタマは、更に吹き飛び紅魔館の壁に叩き付けられた。

「——ツフウウー——」

美鈴が呼吸を整える。先程のサイタマの攻撃、ただの人間の手刀のはずが、日本刀を思わせる刃に見えたのは、気のせいではないと美鈴は感じた。

(食らえばただでは済まなかった)

攻撃を続け同時に相手の攻撃を防げたのは、運が良かったと冷や汗を流す。

その一分ほどの攻防を、ジェノスは固唾を飲んで見守っていた。

「紅美鈴、何と言う強さだ」

自分を気が付かぬ間に投げ飛ばした事に納得する。美鈴は、達人だ。単純な殴り合いでは、サイボーグの自分も分が悪いかもしれないと思うほどに。

ジェノスにとって武術と言うものは、同僚であるS級ヒーローのシルバーファングが扱う流水岩碎拳を特に思い浮かべる。それもまた中国拳法のような動きを持ち、その使い手シルバーファングもまた達人と言える超人だ。だがシルバーファングは、長年の修

行により身につけた力だが、若い美鈴がシルバーファンクと同じかそれ以上の実力を持つとは考えにくい。

「紅美鈴、人間離れた強さと思つたが……チルノ、彼女は」

「言つて無かつた？美鈴は、妖怪よ」

これで合点がいったとジェノスは納得する。人間であるシルバーファンクは、長年の修行で力を身につけた。対して美鈴は、妖怪である。筋力、体力等の肉体の土壌が違ふのだ。そして若いと考えたが、見た目どおりの年齢とも限らない。シルバーファンクよりも長い年月で培つた武術と恵まれた肉体を彼女は持つているのだ。もつとも、ならばシルバーファンクがここにおいて、彼女と戦つて負けるかと言われればそうとも言えない。結局、シルバーファンクも化け物じみた超人なのだ。

（とは言え、先生は今も手を抜かれていたな）

「あんなあいつの弟子なんでしょ？応援とかいいの？」

「いいや、先生は本気どころかまだ遊んでるんだらう。俺はそこからでも学ぶものを探す」

「ふーん」

そのジェノスの言葉は、美鈴にも聞こえていた。そして彼女もサイタマがこれで終わる様な人間ではないとわかつていた。

「……………どうでしょうか、私の強さは」

そう問いかけると、壁にめり込んでいたサイタマは、何事も無かったかのように壁から出て体に着いた汚れを掃った。

「まあまあじゃね?」

(……………マジですか?)

無傷だった。サイタマの体には、全くの外傷は無く精々服が汚れて破れただけだったのだ。サイタマ自信も表情に変化はない。

「まいりましたね、まさか無傷とは」

「……………お前も本気じゃなかったろ」

「ええ、まあ」

二人は、戦いの前に少しずつペースを上げていくと言っていた。実際に全力の攻撃でもなかったのだが美鈴は、一撃一撃手を抜いてはいなかった。サイタマも攻撃は一度しかしていない。けど無傷はねーよと美鈴は内心ツツコム。

「サイタマさん、どうやら貴方には、様子見も何も意味はないようだ」

そう言う和美鈴は、両手を合わせてまた呼吸を整えだした。

「今からは、最初から本気で……………いや、貴方の本気を引き出させていただきます」

「そっちは、ガチでやるってことか? いいぜ」

美鈴の体がサイタマに気を見せた時のように光出した。眩しい光ではない、それは虹色のような光だった。

「弾幕は使いません、しかし今度は気を攻撃に使わせてもらいます」

「ああ、何でも使つて来いよ」

「お言葉に甘えます」

準備が整ったのか美鈴が構えた。そして、開戦。

その時ジエノスとチルノが聞こえたのは、美鈴の爆発的踏み込み震脚による大音と、その踏み込みによつて放たれた渾身の一撃により起こつた破裂音の様な音だった。

（コレも止めますか）

美鈴の拳は、サイタマによつて片手で受け止められていた。止められる事を予想はしていたが、片手で容易く止められるとは美鈴も思わなかつた。

（ならば！）

虹符「烈虹真拳」!!

続けて先ほどの様に美鈴は、拳の連撃を放つ。だが今度の連撃は、その全てが虹色の気を帯び見る者を虜にするほど美しい。

「っ!?!今スペルを」

「スペルカードは、別に言葉にしなくてもいいのよ」

明らかに使用された技、スペルカード。しかしチルノの時のように言葉にして宣言されたものではなかった。ジェノスは、一瞬で放たれたスペルに驚いたがチルノは、何ということも無いと説明した。

「スペルはなんか偉いやつ等が決めたルールでしかないから、あとカツコつけ？」

「……ルール違反と言うわけではないのか」

「ルールつても弾幕ごっことかでよ、これは格闘の決闘だから別にいいんじゃない？」

しらないけどさ、と最後にチルノはしめた。そう言われたらそう納得するしかなく、特に批判する気もないのでジェノスは闘う二人に視線を戻した。一瞬にして十を超える攻撃は、強力である。対してサイタマ、同様に拳を放つ。二人の間で拳と拳のぶつかり合う音がなり、一撃一撃毎に衝撃が放たれる。

(なんて重いっ！)

サイタマの人間とは思えない一撃の重さに驚き、その一撃に込められた威力にもまた驚愕する。力を込めた一発でなく、連続して放たれる拳一つ一つがすでに必殺の拳となっている。並みの妖怪では、拳を合わせただけで吹き飛んでいるだろう。

そこからの攻防は、美鈴が只管に攻めサイタマが守りに入る展開だった。しかし実際のところ守りのサイタマには、余裕が感じられ美鈴はと言うと、サイタマに対し攻めきれず、むしろ疲労感美鈴の方が多く見える。テンポを変え、攻撃手段を変え、からめ

手を使う。だがいかなる攻撃を繰り返しても完全に防がれ、ダメージらしいダメージを与える事が出来ずにいた。強いて美鈴が勝機を見出したのは、攻撃が当たっていると言う事だった。サイタマの余裕の表れなのかわからないが基本的に彼は、攻撃を受け止めて防御していた。それならば、と美鈴は笑う。

(肉体に触れる以上、気は通せまずからね)

美鈴の技、気の真骨頂。練った気を相手へと送り込む。気とは、言ってしまうとエネルギーである。その効果は、使いようによつては肉体を強化する事も可能で日常的には、健康の為に気を使う事も珍しくない。だがどんな薬も摂りすぎれば毒となる。気もまた同じ。過剰に気を肉体に送り込めば、内部で収まり切らなくなり溢れ出して相手を内部から破壊することが可能である。

(次の一撃で試すか)

なるべく悟られないように、そのままのペースで攻撃を続けながら、体内で気を凝縮させる。そしてそれを右手に移しサイタマへと繰り返した。一見変わらぬ攻撃、故にサイタマはそのまま手で受けようとした。だがあたる直前に美鈴の右手が虹色に発光、気を込めた一撃だと気がつく。瞬時にサイタマは、どうするか考えたが、すぐに答えは出た。

「むんっ!!」

「おっ?」

答え、何もしない。サイタマはそのまま攻撃を受けた。

ドツと音が破裂する。美鈴は、渾身の力を込めて打ち込んだ。掌で攻撃を受け止めたサイタマの体が地上から浮き上がり、気が彼へと流れていく。それは一瞬の早業であり、まるで居合いの如く繰り出された。ジェノスのカメラアイでも追えぬ速度での攻撃、美鈴は何時の間にかサイタマの後ろにいた。

華符「彩光蓮華掌」!!

華符「彩光蓮華掌」。それは、極限まで凝縮された気を、相手への攻撃と共に送り込み爆発させる美鈴の必殺の拳。普段は弾幕として使われ、美しき蓮華の花を思わせるこの技であるが、彼女本来の強みである格闘戦においてもその強さと美しさは損なわれる事なく、むしろ増している。

サイタマから溢れる虹色の光は、まさに気の爆発。ジェノスとチルノも思わず目を覆った。

「くっ!先生!!」

半端な攻撃ではないのは確かだ。果たしてサイタマはどうなったのか。

(通ったか? 結構まいってくれると嬉しいけど……っ!?)

美鈴も爆発によって舞い上がった煙が納まるのを待つ。が、ユラリ、と煙の中で何か

が動くのを見た瞬間、彼女の本能が告げた。

(やられ……っ!?)

煙から彼女の先ほどの動きより早く、性格に、必殺の拳が現れ迫った。体感時間は極めて穏やかに、しかし体は一切動かなかった。現れた拳、無傷のサイタマ。迫る絶対的死を目の前にしても、美鈴の体は一ミリたりとも動けない。サイタマの拳が彼女の鼻に当たるかどうか距離、その時、ピタリ、と拳が止まる。それに安堵する前に、拳が運ぶように持つてきた衝撃波が彼女を通り抜け、後ろの紅魔館を襲う。壁をなぎ倒し、草木は舞上がり、突風のようにして衝撃が走っていった。美鈴はと言うと、体は無事だが綺麗なロングヘアールバックに変形していた。

「つと。今の、気だっけ？面白かったぜ」

そしてサイタマ。彼は今までの戦いなど無かったかのようにあつけらかんと感想を述べ、軽く美鈴のデコをたたいた。

「あ、ど、どうも……」

美鈴は呆然としたまま、サイタマを見る。

強い。圧倒的に、強い。それ以外に何もいえない。技術があるとか、力があるでもない。ただ只管に強い。サイタマは『強さ』その物だった。

(高みとは、彼の事なのか)

彼女は人ではない。見た目以上に多くを見てきた。自分が一番など自惚れたりはない。己より強い者など、幾らでもいるのだ。ここ幻想郷ではなお更であった。だが彼は、その中でも一際異彩を放つ。彼女が出会ってきた強者は、何時か勝てると思える。しかしサイタマは違う。まるで浮かばない。

(私の勝つ姿が、まるで……)

奇しくもそれは、ジエノスが嘗て感じたものと同じものであり、サイタマもまた同じようにおどけていたのだった。

ワンパンマンと東方 三撃目

美鈴との試合が終わると、ではいよいよ人里へ、となるのだったがそうは行かなかった。

「この騒ぎはなに？」

冷たい声が聞こえると、美鈴がヒエツと悲鳴を上げる。いつの間にか現れた少女が美鈴の後ろを取っていた。美鈴とサイタマの戦いでさえ目で追うのがやっとで、妖怪とはいえサイタマに何とか迫ろうとした美鈴のスピードにも驚かされたが、今度ばかりは驚愕を通り越した。

（一切反応が無かった……突然現れたのか？）

「ん、急に出たな？」

サイタマはと言えば、驚きもせず少女を見た。メイド服の少女は、冷え切った視線を美鈴に送る。その視線は鋭い刃のようで、美鈴の体を突き抜ける。実際に美鈴は、冷や汗を流し続けていた。

「こ、これは咲夜さん……えっと、ですねえ……これは、お客様を案内しようかと、その」

「客人の案内で、庭は吹っ飛ばないわよね？」

立てた親指を門の後ろに向ける。粉碎され吹き飛んだレンガ、それが飛び散り落下したため荒れ果てた中庭がサイタマ達の視線の先にあつた。

「あ、ワリイそれ俺だ」

「……美鈴、こちらは？」

「こ、こちらはサイタマさん、そちらの青年はジェノスさんで、**“外”**から来られたらしい方達です、はい」

「そう……外来人ね」

「道に迷われたそうで、案内をしてあげようと」

「で、庭がああなるの？」

「すんませんしたっ!!」

美鈴の土下座が炸裂した。だが咲夜と呼ばれたメイドの声のトーンが段々低くなるにつれ、美鈴の顔色もドンドン青ざめる。あれほどの實力を持つ美鈴が怯えるには、いささか少女は若すぎるように思えるジェノスであつたが、考えてみれば彼女も純粋な人間である保障はない。

(少なくとも、美鈴に勝てる何かは**“ある”**だろう)

などとジェノスが冷静に分析をしている間も、美鈴の心拍数は上がり、咲夜の視線が

突き刺さる。

「なあなあ、あんまそいつ責めないでくれよ。庭吹き飛ばしたの俺だからさ、悪かったよ（うわあゝやべえゝめっちゃ怒ってねえアレ？げええ、弁償って言われたらどうしよう……俺今卵しかないんだけどなあ）」

きつかけは美鈴の組み手の申し込みであるが、実際に庭を吹き飛ばすような攻撃をしたのはサイタマであるため、彼も気まずそうに名乗り出る。しかし内心冷や汗ダラダラの心境で、誰も見てないなら最悪「知らん振り」なのだが、チルノと美鈴がいるのでここは素直に謝罪をする。咲夜は視線をサイタマへと移した。

「……いえ、恐らく美鈴が組み手でもどうかと誘ったのでしよう、お客様はそれに応えただけ、お気になさらず」

「え、そう？ラツキー」

「サイタマさんっ!？」

まさかの即時後退、己の無実を得て満足した様子 of サイタマをみて、弁護を期待した美鈴が悲鳴を上げた。

「というわけで、美鈴」

「弁護人を！弁護人を希望します！」

「不要よ、あなたは——」

その一瞬は、サイボーグジェノスの知覚を完全に超越し、感知を不可能とした。
「有罪よ」

「んぎやう!!」

瞬きもせぬ間で、目の前で美鈴がハリネズミの様な姿になった。体中に鋭利なナイフが突き刺さっている。

(まただ……っ！俺のセンサー類がすべて無反応だった。超高速で動いたとしても、何かしらの動きは感知可能なはず、それが一切わからないとは、いったい……)

ジェノスは驚愕する。このメイド少女、咲夜が仮にサイボーグであるジェノスの反応速度を超えるスピードで動いたとしても、動いた際に出る空気の乱れや、踏み込みなどで起こる土埃等如何しても残る動きの名残がある。だが彼女にはそれが無かった。

「ひ、ひどいです……ここまでしなくても……」

「そのくらいじゃあ、死なないでしょ」

「ひんひん……扱いが雑う」

わりとがつつりナイフは刺さっているが、流石妖怪と言うべきか美鈴は案外平気そう
で生々しさは無い。むしろギャグ漫画の一コマのようだった。きつと数コマ後には完
治してるだろう。

「失礼しましたお客様。サイタマ様、でしたか。外からお越しとのことですが」

「うん、まあそうらしい」

「人里への道をご希望ですか？」

「そうだな、大体はさつき跳んで確かめてわかったけどよければ頼むよ」

「(跳んで?) 畏まりました、では適当な妖精メイドにでも……失礼」

「お？」

咲夜が使用人の誰かに道案内をさせようとした時、彼女は不意に館へと視線をそらした。すると一瞬で彼女の姿が消える。そして十数秒の後咲夜の姿が現れた。サイタマは、「おおっ」と軽く驚き、ジエノスは三度彼女の動きが捉えられない事に驚く。

「サイタマ様、どうやら主がお会いしたいようです」

「俺に？」

「はい」

どうやってかは知らないが、彼女は紅魔館の主に呼び出されたようだ。そしてその言葉を伝えにきた。さて、どうしたものか。とサイタマは頭をポリポリとかいた。急ぎの帰りではないのだが、なんだか面倒にも思えるので悩んでいた。

「今は丁度お昼ですから、よければ食事もいかがですか？」

「え、飯出るの？」

「ええ」

「ジエノスイこう」

「はい先生」

サイタマは飯に釣られた。非常に嬉しそうだ。基本庶民思想の彼はタダ飯に弱かった。そしてサイタマが行くと言うなら、はい、と答えるのがジエノスであった。

「あたいは？」

「チルノも来なさい、ついでだから」

「やった」

ついでにチルノも食事でありついた。



幻想郷某所、一見して普通の日本家屋に思える建物であるが、そこは不思議な気配が支配していた。そこで一人の女性が縁側に腰掛けながら思索していた。その表情は、穏やかな陽気に反し少し険しい顔であった。

「……藍」

「(イヤ)に」

従者の名を呼んだ。スツと、控えていた従者、美しい九つの尾を持つ女性が後ろに現れる。

「聞かせて」

「は、人里でも幾つか報告があります。そちらは霊夢と寺子屋の白沢が倒しましたが、妖怪の山では、天狗達との小競り合いをした集団がいたようです。大きな被害が出た所は無いようですが、依然出現率は増えています」

「霊夢が一人ぼやいてたわ、過労死させる気かって。うふふ、私がどこかで聞いているの知ってて言ってるのよ。普段やる事なんて対してないのだから、丁度いいぐらいなのね」

「……紫様」

藍が主の名を呼んだ。縁側の女性、紫は視線を藍へと向けた。

「此度の異変、いかがいたしますか。里に被害が出るようになれば、人と妖怪のバランスが崩れるかと……霊夢達とてこのままでは手が回らなくなります」

「……少し前にね」

紫は視線を外に戻し話す。その視線は、ある方向へと向かう。

「二つ、変なのが紛れたわ」

「奴等ですか？」

「いいえちがうわ、けど来た所は一緒よ。あつちは、狩る側のようにだけど」

「狩る、ですか」

「ええ、世に仇なすモノを狩る者達。外じゃ“ヒーロー”とか言われているわ」

「ヒーロー……英雄ですか、外でもまだそのような者がいたとは」

「外も外で不思議な事になってるようね。本当は関係ない事だけど、ちよつかいかけて来るなら追い出さないとね」

「もちろんです」

「それに、その内の一人、凄いわあ」

紫は視線を向けたままクスクスと笑った。藍が紫の視線の先、森が広がる方向に目を向け、その先に何があるかを思い出す。

「紅魔館ですか」

「あの吸血鬼、〃弄った〃のかしら……今そこに居るようよ」

「戻さぬのですか、外に？」

藍に言われ紫は直ぐに頭を横に振った。

「……外の事は外の専門家にやらせた方がいいんじゃないかしら」

「では」

「対応は今まで通りでいいわ。ただ、ハゲ頭と鉄の体の男には、接触は構わないけど手を出さないこと。特にハゲにはね、痛い目見るわよ」

「かしこまりました」

話が終わると藍は、ふうつと奥の暗闇に紛れ消えた。それを見るわけでもなく、紫は

ただただ、紅魔館の方向を見続けていた。紅魔館にいる二人、サイタマとジェノスを見守るかのよう、彼女はただ座るのみだった。



紅魔館の庭園は、ひどい有様であった。咲夜の言うように、吹っ飛んだと言っている。サイタマの（本人的には、セーブしたようだが）一撃は、草花やベンチなどを悉く吹き飛ばし粉砕した。サイタマもそれをみてばつが悪い気持ちになるのは、当然と言えた。

「いや、ほんと悪い事したな」

「かまいませんよ、悪いのはちよっかいをかけた美鈴ですから」

なので咲夜にそう言ってもらえると多少気持ちが軽くなる。

「ん？あれは……」

ジェノスがボロボロの庭中を飛んだり駆けたりする小さな存在に気がつく。少女のように小柄なそれは、羽を生やしメイド服を着込んでいた。

「妖精メイドです。庭の修復に当たってます」

「妖精？」

ジェノスはトコトコついてくるチルノを見る。彼女もまた妖精である。氷を操る氷精だ。チルノは視線に気がつくと、周りで働く妖精を見て腰に手を当てて少し憤慨した。

「あたいをそこいらの妖精と一緒にしてもらっては困るわ」

「なにか違うのか？」

「違うわよ」

「普通の妖精とは違うのです、この子は」

二人のやり取りを聞いていた咲夜が、ジェノスの疑問に答える。ほんの数時間前に幻想郷へ来たばかりの彼にとって、妖精の違いなどわかる筈もない。

「普通の妖精なら普通の人間でも勝てます。ただチルノは能力がありますから、迂闊に近寄れば最悪死にいたるでしょう、寒くて」

「あたいは負けん！」

「ここ最近黒星多いけどね」

「違うわよ、見逃してやってるの」

（見逃されているの間違いだろう）

ジェノスとサイタマとの戦いでも、結局チルノは負けている。本人的には見逃しているという風に、都合よく解釈されているようだ。その場の勢いで言っているのだろうと、ジェノスは特に突っ込まなかった。それより気になるのは、妖精メイドの数である。

「多いな」

「今現在832人のメイドがおります」

「……いや、多すぎないか？」

紅魔館は、見た限りでも大きな屋敷である。しかし、800人を超えるメイドは、流石に多すぎるとジエノスは思う。だが咲夜は特に気にした様子はなかった。

「数は出入りが激しいので気にはなりません、入るも辞めるも自由です。100人の時もあれば、最高では1000人を超えた時もありました。さらに言うなら妖精に給料はいりません、紅茶と自由を目当てに来るだけです」

「……妖精とは奔放なのだな」

ごっこ遊びの感覚もあるのかも知れない。無邪気そうな見た目からは、咲夜ほどのメイドとしてのオーラはない。それでも数は多ければ役に立つ。せっせと紅茶と自由のために働くメイド達の手で、壊された庭が直されて行く。

「お、美鈴もいるぞ?」

サイタマがメイドに混ざり作業をする中華娘に気がつく。結果として全責任を負った彼女は、メイド達よりも必死に修復作業に取り組んでいる。

「彼女は庭師でもありますので、やってくれないと困ります」

ちなみに咲夜が昼の食事にサイタマ達を招待したように、通常ならメイド達や美鈴は昼休みになるはずだった。妖精メイドは、数が多いので交代しながらでもいいが、美鈴は昼御飯抜きである。哀れな門番を見た後は、ついに二人は紅魔館へと足を踏み入れる

事になる。

■ 紅魔館を見たサイタマの感想は、「広い」「デカイ」「紅い」の三つだった。生まれてこの方、ここまで立派な洋館と言う物に入った事がないので、珍しくもあったが、しかし特別興味を持つほどではなかった。一方ジエノスはというと、体から僅かに機会の駆動音がする。様々なセンサーやレーダーを起動させ、この館を探っているのだ。

(センサー類で感じる異常はない、一見してただの洋館、か……しかし住人が住人だ。常識は捨てねばならないな、吸血鬼とやらも気になる。先生が負ける事は無いだろうが、危害を加えるならば……)

実際ジエノスは気が付いていないが、この館には彼が感知できる物以外で多くのエネルギーや物体がある。彼の肉体は、クセーノと言う天才の手によるボディだが、科学とファンタジーとでは相性が悪い。

「サイタマ様とジエノス様は、お嫌いな食材はありますか？」

「不味くなきやいいよ」

「有機物であれば対外の物は、消化しエネルギー変換が可能だ」

「では何でもOKですね」

後半は普通無い回答だが、咲夜はうろたえる事は無かった。

「それと、ここから先はしつかりとついて来て下さい。侵入者対策で色々と弄られて見た目以上に広く入り組んでいるので」

「迷路のようなものか？普通の廊下に見えるが」

「そこは不思議パワーとでも思ってください」

「また『程度の能力』とやらか、しかしそこまでして侵入する奴なんているのか？」

「いますよ、しつこい女泥棒が」

「ここが吸血鬼の館と知っての侵入なのか。居眠り気味とはいえ、妖怪の門番に謎の瞬間移動を使えるメイド、そしてまだ見ぬ吸血鬼。その女泥棒とやらは、実力者か命知らずのどちらかだろう。」

（しかし、なるほど。俺のレーダーでも建物の構造が把握できない理由はそれか。見た目に騙されて、迂闊に歩くと彷徨い続けるな）

音波や振動でジェノスは、構造物の内部構造を大凡把握する事ができる。しかし、それで得られる情報が妙なエラーを起こし続けていたが、納得がいったようだ。

「なあジェノス」

不意にチルノがジェノスに声をかけた。

「どうしたチルノ」

「サイタマきえたぞ」

「……なに？」

チルノに言われ、初めて気づいた。サイタマの姿がいつの間にか消えていた。

「チルノ、先生はどこへ」

「あたいは知らん！なんか気づいたらいなかった」

「……どこかで横道に入ったようですね」

「探さなくてはっ！」

「お待ちを」

駆け出そうとするジェノスを咲夜が止める。

「不用意に歩かれては、貴方も迷ってしまいます」

「しかし、先生を放っておくわけには」

「こちらで妖精メイドの搜索隊を編成します。今ならそう遠くへは行っていないと思いますので。お二人は一先ず私について来て下さい。その貴方」

咲夜が近くで作業していた妖精メイドに声をかけた。作業の手を止め、妖精メイドはフヨフヨと近寄ってくる。

「お客様の一人が迷われたわ。搜索隊を編成して探してちょうだい。サイタマと言う名で、男性で見かけない服装だからすぐわかるわ」

そう言うのと、妖精メイドはピシッと可愛らしい敬礼をして何処かへと向かっていっ

た。どこかこれすらも遊びに思っている様子だった。

「人海戦術なら大丈夫でしょう」

「……だといいが」

「迷ったとは言え、早々変な部屋には入れないようにしています。大丈夫ですよ」

咲夜はそう言うが、しかしジェノスは不安しか無かった。これが普通の人間なら確かに心配ないだろう。だがサイタマは色々と規格外すぎる。何をするかまったく予想が付かないのだ。本人にその気が無くとも、トラブルの方から彼の方へと行くのだからサイタマ本人の心配より、果たしてこの館が無事でいられるか不安でしようがなかった。

……」

一方サイタマは、実はそう遠くない場所にいた。だが、同時に焦っていた。廊下に立ち尽くす彼の足元には、極めて高級そうで値段が張り凄まじく豪華—— “だった” 壺がある。

案内されながら歩いている途中、豪華な壺を見つけたサイタマは、別に美術品に興味はないのだが、物珍しさから近づきそれを観察した。そしてジェノスに「高そうな壺があるぞ」と言おうとしたのだが、すでに彼らは先に進んでいた。しまったと思い追いか

けようとした時、彼の手が壺と接触、そしてバランスを崩した壺は、無残にもサイタマの目の前で粉々に砕け散ったのだ。

「やべーやべーやべーやべーやべーっ!!やばいぞ、これえ……っ弁償できねえぞ俺、絶対高いよこの壺、どうするよ、えええくくくっ!!」

パニックになったサイタマは、取りあえずバラバラになった破片を集めるが、集めたところでどうにかなる物ではない。慌てふためく中、遠くから声が聞こえてきた。

「サイタマさん、どこですー?」

「いたら返事くださいー!」

チルノや美鈴でも咲夜でもない声だった。おそらく先に説明があつた妖精メイドとわかる。迎えが来てくれたのかと僅かに安堵したサイタマだったが、すぐに顔面が蒼白になる。

(いや、ダメじゃん、バレるじゃん、壺見られるじゃんっ!!)

柵も何もない廊下、証拠の隠滅は不可能だ。サイタマはとつさに自身がつけている赤いマントを取り、それで粉々の壺を自分で包み、宛ら盗人のようなスタイルで声がる方向の逆へと逃げ出した。そして入れ替わるように妖精メイドが2人現れた。

「いたー?」

「いないー」

ふよふよと浮きながら、サイタマがいないな〜とどこか緩い雰囲気妖精メイド。そのうちの一人が、壺があつた場所に気づく。

「あれ、ここ壺飾つてなかった？」

「んー？あつたようなないような」

両者は首を傾げるが、どんな壺があつたか思い出せない。そして二人は、思い出せないなら、壺はきつと無かつたのだと結論を出した。

「まあいいか、お屋敷広いから違う場所と間違えたかもー」

「けど何か置いてあつたならないと困るよねー」

「なら変わりにこれおいとこー」

一人の妖精メイドが、ポケットから取り出したものを壺のあつた場所に置いた。それは小さなドングリだった。

「あ、帽子つきー！」

「いいでしょー」

■
そう二人はキヤイキヤイはしやぎながら、再びサイタマ搜索へと戻っていった。

■
ジェノスが通された部屋は、想像したよりも広大であつた。そもそも、廊下の長さや部屋の数からして、外から見た時の屋敷からは想像ができないものだった。先ほど咲夜

からの説明どおり、「不思議パワー」で見た目以上に広くされているのだろう。広大な部屋には、その広さに見合った食卓があった。すでに食器は並び、後は料理を運ぶだけとなっている。

そして、その卓の奥。そこに彼女はいた。

「ようこそ、お客人」

尊大。その言葉が似合うもの言い、そして態度。

（感知できないが、やはり妙な力があるな……）

僅かに残る生態部分、人間的感知能力。感じるのは、彼女から発せられる殺気、威圧感。

「そう構えなくていいわよ、とって食いはしないわ」

「鉄臭そうだしね」と彼女は言う。

「なんでも外から来たそうね？」

「……そのようだ」

「まあ、最近増えてるみたいだけどね。大抵はとつと人里にでも行くし、私は幻想郷の管理者じゃないから関知しないけど」

「なら何故俺達を招いた？」

「まあ、色々理由はあるわ……」

突然、彼女の姿が揺らぐ。

「貴方、面白い生き方ねえ」

「むうっ!？」

するとどうか、彼女が今まで座っていたはずの椅子には誰も折らず、直ぐ傍に彼女は現れた。

（こいつも瞬間移動をつ!?)

「あら、本当に鉄なのね、河童が見たら喜びそう」

（……河童?）

ジェノスは咲夜に続きなぞの瞬間移動をした彼女に驚きを隠せない。

「体中殆ど鉄ばかり、よっぼど”愉快な事”があつたのね」

「……失礼だが、貴方には関係の無い事だ」

「ええそう、私には関係の無いことよ。貴方の人生なんて私から見れば些細な時間でしかない」

「けれど」、彼女は続ける。

「私最近暇なの、けど異変なんて起こしたら巫女に退治されちゃうわ。そしたら丁度愉快な二人組みが来たからね」

「……まさか、暇だったから招いたのか?」

「まあね」

彼女は、悪戯っぽく笑う。

「貴方達二人をこの『場所』に招く。この事でどう運命が動くかしらね」

「運命だと?」

「そう、おとなしく人里に行った場合もあつたでしょうし、けれど今回は私と出会つた。貴方の敬愛する師匠も、きつと今から面白い事起こすわよ」

「お前は……何をしたいんだ」

「ふふっ」

彼女はジェノスに向かいその背に生える翼を開き、静かに言つた。

「改めて、ようこそ外からのお客人。私は紅魔館の主、レミリア・スカーレット。見てのとりの『吸血鬼』よ」